

3月5日、中央公民館で第9回目の「道徳のまち笠松」のつどいが300人の参加者を得て開催されました。会場の入り口では、平成28年度の「道徳のまち笠松」が取り組んだ活動の様子をパネルで紹介しました。ホールの中では、情報紙の「ちょっといい話」を掲示し、皆さんに楽しく読んでいただきました。さらに、平成28年度に開催された第3回“かさまつ いいね”写真展の全応募作品を展示しました。写真展には、一般の部と児童・生徒の部を合わせて122点の応募があり、その中から入賞作品6点を選び、表彰式を行いました。

つどいは2部に分かれ、第1部では岐阜工業高等学校デザイン工学科の有志が、道徳のまち笠松への思いを発表してくださいました。大ホールには、デザイン工学科の卒業作品が並び、会場に華を添えていただけました。

第2部では、「7代目が語る二宮 金次郎～日常にねむる幸せの種～という演題で、中桐 万里子さんから講演をいただきました。金次郎の①「まずは知る。よく見て気付く。」②「そして行動する。工夫して実践する。」ことの大切さを教えていただき、生きる勇気を与えていただきました。

ホールの聴衆は、素敵な講演内容に聞きほれ、積小為大や「takeの達人」になることの大切さを再認識されたことでしょう。

つどい後のアンケートには、「講演が分かりやすくて、とてもよかった。」「偉人を再発見した。」「来年も参加したい。」などの感想が寄せられました。



金次郎の実践を講演中の中桐さん



デザイン工学科有志による発表

かさまつの民話「昔むかし」

畑つなぎ⑥

兵蔵は、もうこれで終りだと思った。「あすにもおとりしらが来る。あと一ヶ月あれば堤が完成するのに。」くじけそうな自分をふり立たせながら、村人をはげまし続けた。

人々はものにつかれたように土をはこび続けた。「畑つづく、畑つづく」と祈り、もくもくと働き続けた。「これさえできればわしらに米のめしが返ってくる。」「あと三日あれば堤は完成する。堤づくりのおとがめはわしが負おう。そして、庄屋さまと同じように村人の身代わりとなって死んでいこう。」兵蔵は一心に土をはこぶ村人たちをみわたせる位置にすわると静かに手を合わせた。その耳に、

「畑つづく」の音が、波のように伝わってくるのである。

そのころ、北代官所の酒井代官は、「加納ばかりが天下の民ではない。笠松、柳津の百姓もお殿さまの民である。松枝、柳津も大水がこないように堤を作ってこそお殿さまへの奉公じゃ。もし、このわたしの考え方にまちがいがあれば、わたしの責任じゃ。」というさばきをしていた。

このしらせは、よく朝、村々へ届けられた。村人たちが、よるこびの半鐘をならし、堤をなせまわし、感激をわけあっていた。兵蔵は、村人のはこんだ畑つづくの土の中へ顔をつっこむように倒れこんだ。

(おわり)

かさまつ民話「昔むかし」は昭和54年に発行されました。中央公民館・松枝公民館・総合会館でご覧いただけます。